



ギターと共に

みなみ



1 話

私は貝嶋 流しの歌手である
いろいろな町の酒場で歌わせてもらっている

今日はこの店に入って歌わせてもらおうと思う
店に入ると30代くらいの男性とちいさな女の子が
椅子に座っていた

白髪の店長が私に
「流しかい？一曲やってくれないかい？」と
声をかけてくれた

「君はどんなのをやるんだい？」
「基本はオリジナルですが
リクエストがあるなら他の曲でも」
「そうかい じゃ君のオリジナルとやらを
聞かせてもらおうかね」

ギターを弾こうとすると
ちいさな女の子が私の膝に乗ってきた

「すみません」
30代くらいの男性が
ちいさな女の子を引き離そうとしたのだが
嫌がって離れてくれない

「こら まるみいいかげんにしなさい」
「いいですよ このままで」
「弾けるのかい？」
「はい なんとか」

私はギターを弾きながら私が生れた田舎のことを考えた
膝にのせている小さな女の子が田舎に残してきた
妹を思い出させたからである

「いい曲だったよ 歌詞もいい」

「ありがとうございます」

「膝にまるみがのってなかったら
もっとうまくやれるんだろう？」
と30代くらいの男性は
ちいさな女の子を膝からおろして椅子に座らせた

「もう一曲やってくれないか？いいだろう店長」
「ああ大歓迎だよ」
「では昨日作ったばかりの新曲を」
「おおいねえ やっとくれ」

膝に乗っていたちいさな女の子は私の曲を聞いて
「素敵な曲だね」と
30代くらいの男性に話しかけている

「まるみに音楽がわかるのか？ドレミも知らんくせに」
「お父さんのバカ 酔っ払い」
ちいさな女の子は怒って椅子に座り
テーブルに置いてある肉じゃがを頬張った

「いっばいどうだい？」
俺のおごりだ いい曲を聞かせてもらったからね」
「はい いただきます」

飲み終わって立ち上がると
「頑張れよ 君はいい歌手になるよ」と
店長が言ってくれた
「ありがとうございます ごちそうさまでした」

「お兄ちゃん バイバイ」
私はちいさな女の子に手を振り軽く会釈をして店を後にした

素晴らしい店だった
次にこの町に立ち寄るときはまた歌わせてもらおう
さて次はどんな出会いが待っているのでしょうか？

2話

私は貝嶋 流しの歌手である
いろいろな町の酒場で歌わせてもらっている

今日はこの店に入って歌わせてもらおうと思う
店に入るとかなり酔っている二人の男性が
椅子に座っていた

黒髪の髭を蓄えた店長が私に
「流しかい？一曲聞かせてくれないかい？」と
声をかけてくれた

かなり酔っている二人の男性は
私の歌はまったく聞いていなかったが
店長は違った

「いい曲だ 歌詞も素敵だ」
「ありがとうございます」

「もう一曲聞かせてくれないかい？」
「はい リクエストは」
「君のオリジナルをリクエストするよ」

さっきまでまったく聞いてなかった
かなり酔っ払っている二人の男性が
「いい曲だ なんだか田舎のお袋を思い出したよ」

「俺もだよ ひさしぶりに田舎に帰ってこないか？
今度の連休にでも」
「そうだな お袋の事も心配だし」と
話していたのだった

「兄ちゃん 田舎はどこだい？」
「九州です」
「九州のどこだい？」
「大分 おおいた です」

「俺の田舎も九州なんだ 熊本だ
20年も前になるかな？ こいつと一緒に働きにきたんだ
兄ちゃん 飲みなよ 俺のおごりだ」
「はい いただきます」

飲み終わって立ち上がると
「この町にまた立ち寄ることがあったらまた歌ってくれよ
俺兄ちゃんの歌気に入っちゃったからよ」

「はい 必ず」
「頑張れよ 兄ちゃん」
「ありがとうございます ごちそうさまでした」

「ちょっと待ってくれ いい曲を聞かせてくれたから
兄ちゃんチップだよ」
「とてもありがたいのですがいただくわけには・・・」

「遠慮しないでもらっておくといい
このお客さんは飲むと気前がいいんだ」
「ありがとうございます いただいでいきます」
私は深く会釈をして店を後にした

素晴らしい店だった
次にこの町に立ち寄るときはまた歌わせてもらおう
さて次はどんな出会いが待っているのでしょうか？

3話

私は貝嶋 流しの歌手である
いろいろな町の酒場で歌わせてもらっている

今日はこの店に入って歌わせてもらおうと思う
店に入るとかなり酔っぱらって
グラスを持たまま机に伏せている男性がいた

こぶとりの女性が私に
「流しかい？一曲聞かせてもらいたいね」と
声をかけてくれた

「その前に一杯どうだい？」
「はい いただきます」
「流しさん これ食べるかい？」
「だんご汁ですか」
「流しさん田舎は大分 おおいただね」
「はい」

「母ちゃんのだんご汁は美味いぞ」
「はい とても美味しいです」
「そうかい おかわりあるよ」
「はい いただきます」

「流しさんはどんなのをやるんだい？」
「基本はオリジナルですが
リクエストがあるなら他の曲でも」

「そうかい じゃ千春を」
「私はオリジナルが聞きたいんだよ
父ちゃんの見解なんか聞いてないんだよ」

「では千春をやって次にオリジナルをやりましょう
よろしいでしょうか？」
「構わないよ」

私はギターを弾きながら田舎の母のことを考えた
懐かしいだんご汁の味が
田舎の母を思い出させたからである

「千春も上手かったけどよ
オリジナルのほうが俺は好きだね
なんか心にしみてくるいい曲だった」
「私もそう思うよ」
「ありがとうございます」

「流しさんギターは誰かに習っていたのかい？」
「いえ 習っていません 独学です」
「娘のみのりに流しさんの
爪の垢を煎じて飲ませたいねえ～」

「そうだな あいつピアノ習いたって言うから習わせたら
たった3回行っただけで止めやがった」
「みのりは父ちゃん似だからね 情けないよ」
「なんだと」

私が席を立つと
「お勘定はいらないよ いい曲を聞かせてもらったからね」と
こぶとりの女性が言ってくれた
「ありがとうございます ごちそうさまでした」

「流しさん客も来ない汚い店だけど
またこの町に来ることがあったら寄っとくれよ」
「はい」
私は深く会釈をして店を後にした

素晴らしい店だった
次にこの町に立ち寄るときはまた歌わせてもらおう
さて次はどんな出会いが待っているのでしょうか？

ギターと共に

<http://p.booklog.jp/book/48515>

著者：みなみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/minamimoriyama/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48515>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48515>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.